2023．12．8
No.237

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間2,000円）

一日も早い停戦を！

11月、1年分の悲しみや苦しみを体験しました。あっという間に北海道の季節は晩秋から冬へと変わりつつあります。

「容態が悪い」とグループホームから連絡があり、母のところに、苫小牧の私の叔母（母の末妹）夫婦と駆け付けました。その日は、私たちの来訪を喜び笑顔もありました。その3日後11月10日の午後、安らかに息を引き取りました。97歳でした。

私は長女です、年子の妹は埼玉県久喜市と遠いし、私の夫は長く入院中のため、さまざまなことを一人で仕切らなければならず身近な親族だけで無宗教で簡素なお別れの会をしました。夫の心配もあり237号の編集に時間がかかったことをお許しください。

母の出棺の１１月１２日朝、斎場の５階から見た天使の輪

ガザ全域でイスラエル軍による空爆が続き、命の砦である、病院への空爆には怖ろしさに胸がつぶれました。特に停電のために保育器から出された赤ちゃん6人の死はむごい。祈りだけでは足りない。行動しなければと思いますが、パレスチナの人々への支援寄付ぐらいしか私にはできません。

UNウィメン（国連女性機関）のバホウス事務局長は11月22日の国連安全保障理事会で「ガザでの1万4000人を超える犠牲者の67％は女性と子どもだ」と述べました。子どもの犠牲は5600人にも上っているとの報道がありました。とても人間のする行為とは思えません。

読者のM.Mさんから届いた記事のキリバリの一部を紹介します。ジェノサイドへの沈黙は歴史の忘却―岡真理氏・駒込武氏指摘2023年10月31日　「ブログ・アリの一言」からの抜粋

岡氏は、イスラエル市民に対する殺傷、人質は戦争犯罪だが、ハマスはなぜ敢えてそれを行わざるを得なかったのかとして、イスラエルによるパレスチナ占領、それを後押しした欧米諸国の歴史的責任を指摘しました（10月23日のブログ参照）。そのうえで、歴史的経過を踏まえないでハマスを「テロ集団」と断じる報道によって「何が忘却されているのか？」としてこう述べました。

「忘却されているのは、イスラエルが入植者植民地主義国家であり、ユダヤ人至上主義のアパルトヘイト国家であること。そして、ハマスはイスラエルの占領から祖国の解放を目指す民族解放運動だということ」そして、「現在進行中のイスラエルによるジェノサイドに対して沈黙することはイスラエルと共犯だ」と指摘。沈黙によって忘却されるものを次のように述べました。「第1に、植民地支配・占領の歴史において、日本は朝鮮・台湾の人々の抵抗に対し、どのような暴力を行使してきたのか。第2に、南アフリカのアパルトヘイトに対し、日本はどのような姿勢をとってきたのか。第3に、惨事の衝撃（関東大震災）による流言飛語やそれに便乗した当局の言説に煽られ、メディアもそれに共犯し、いかなる集団虐殺をもたらしたのか。そして第4に、核兵器によるジェノサイドを経験した国として、今、広島と長崎に核爆弾を投下した国（アメリカ）が、武器をイスラエルに供与してジェノサイドを行っていることに対する責任である」。

日本はアメリカに遠慮せずに、「即時停戦」を訴えるべきだし、他の国々にも積極的に働きかけてほしい。そうでなければ、日本も含めた他の国でも同じことが起きるのではないでしょうか。せめて戦争の歴史を知ることが大事だとスヴェトラーナ・アレクシエーヴィチがノーベル文学賞を受賞するきっかけとなった名著「戦争は女の顔をしていない」のコミック版（小梅けいと著）1ー3巻を読みました。第二次世界大戦中、もっとも過酷な戦場の一つになったといわれる「独ソ戦」。ソ連側だけでも死者は約2700万人といわれています。アレクシエーヴィチは独ソ戦に従軍した女性たちに寄り添い、500人を超える女たちの「小さな声」を聞き取り続け記録しました。

原作が出版されたのは、ペレストロイカ（改革）が始まる直前の1984年です。紙面の都合で女性たちが語った言葉を記します。戦争の残忍さを想像していただけたらと思います。

「戦争で一番恐ろしかったのは、男物のパンツを穿いていることだよ」「井戸に放り込まれる子どもの叫び声が今でも耳に残っています。そんな叫び声を聴いたことがありますか？」「ねえ、あんた、一つは憎しみの心。もう一つは、愛情のための心ってことはありえないんだよ。人間には心が一つしかない」「何もかもが燃えてしまった。ヴォルガで水さえ燃えていた」「死んだら魂はどうなるのか知らないけれど、両手は休めるんだろうね」「戦闘のあと、誰も生き残ってないことがあったの。大釜いっぱいスープを作ったのに、誰も食べてくれる者がいないってことが」

極限の状況で感情が麻痺し残虐になっていく心の動きもコミックならでは伝わってくるものがありました。

「いけない。伝えなければ。世界のどこかにあたしたちの悲鳴が残されなければ。あたしたちの泣き叫ぶ声が」の思いはウクライナでの戦争と、イスラエル軍のガザへのジェノサイドが重なりました。ナチスのジェノサイドを再び許してはならない。（文・写真　樋口みな子）

今こそ憲法の「平和に生きる権利」を守るために市民運動を継続しよう

長沼一審判決50周年記念集会実行委員会
代表　福原正和

9.9 講演する内藤功さん（写真・実行委員会提供）

9月9日長沼一審判決50周年記念集会は、予想を上回る道内外約250名の参加で無事終了したことをご報告・お礼申し上げます。（資料が足りず、事務局員には当たりませんでした）

「無事」と書きましたが、集会途中で講師の内藤功弁護士が転倒してしまうアクシデントがあり、本当にびっくり致しましたが、特に大きなケガはなく無事に9月10日東京の自宅にお帰りになったとの事です。お電話で「昨日遅くなりましたが自宅に帰りました。皆さんの感想を是非聞きたいです」と元気に話しておられました。

集会ではまず前田輪音さん（北海道教育大学）から恵庭から長沼に至る歴史と、長沼水害の様子等分かりやすいスライドを使って講演があり、その後記念講演・内藤功弁護士の長沼判決の恵庭事件からの経過と意義が話されました。質疑応答では若い方から「もし憲法9条が変えられてしまった時には、どのように運動を進めるべきか」との質問が出されましたが、「たとえその様な状況になったとしても、変わる事なく平和運動を進めるべき」という力強いお答えでした。

シンポジウムでは、恵庭事件被告の野崎健美さんから違憲の自衛隊法で市民が裁かれる事そのものが憲法違反になること。佐藤博文弁護士からは自衛隊員の自殺率は一般の何倍もある事、自衛隊員とその家族を含めた「平和に生きる権利」を守っているのが憲法である事が話されました。

町議13期目の長沼平和委員会藪田亨さんから「長沼平和田」の看板設置報告と、「憲法9条の碑」を判決50周年を期に長沼に作りたい、との提案がありました。（今後の課題です）

長沼テント学習会

北大生らが長沼で援農しながら支援

白谷秀一さん（北大平和委員会OB）から、学生時代長沼で学んだ「現場で考える事、当事者に寄り添う事、継続する事」を胸に、千葉で（難民）外国人子弟の高校入学支援をしている事が話されました。

富山県からご家族4人で参加された福島重雄元裁判長（車椅子）、矢臼別の吉野宜和さん、芦別事件の井尻光子さんが会場内で紹介され、参加者の皆さんからの大きな拍手に包まれました。

集会アピールは、長沼判決にある「平和に生きる権利」が人類普遍の権利である事、日本が再び「戦争する国」とならない為に力を尽くす事等が、本庄十喜さん(道教育大)から提案され拍手で確認されました。

若手弁護士桝井妙子さんから閉会挨拶があり、次の十年に希望の持てる集会となりました。

懇親会では、70余名の参加者があり、長沼事件に関わった人だけでなく、若手弁護士、研究者、ジャーナリスト等の方々も参加し、最後には女性研修医、若手研究者数人から、運動を今後に繋いでいきたいとの決意表明がされ、感動と希望ある会となりました。

翌10日長沼現地視察・交流会は子どもも含めバス満杯の参加者で、快晴の天候の中、藪田さんを支える地元の方が準備された美味しいジンギスカンを食べ、それぞれの思いと決意が語られ有意義な交流が出来た事を報告致します。

ご高齢の参加者も多く今年がラストチャンスと改めて感じました。この集会成功の為に「呼びかけ人」となって頂き、メッセージ、賛同金を寄せて頂いた皆様に改めて実行委員一同感謝申し上げます。

今こそ憲法の「平和に生きる権利」を確認し「自衛隊は違憲」として平和の為にともにたたかいましょう。

言論の自由は平和を守る

「青木理氏と道警ヤジ排除を語る」参加報告　文と写真・飯島秀明

主権者として見過ごしてはいけないこと。その最上位が権力による権利侵害ではないでしょうか。参院選さなかの2019年7月、白昼の札幌駅で衆人の見つめる中で行われた、遊説中だった当時の首相・安倍晋三にヤジを飛ばした市民を道警が強制排除した事件は、入管施設での深刻な権利侵害と並び、まさにその典型だと思います。9月16日、排除された当事者らでつくる「ヤジポイの会」の主催で、硬骨のジャーナリスト青木理さんを招いての集会があると聞き、北海道自治労会館に足を運びました。以下、私的な参加報告です。

公安警察という存在

集会ではまず、当事者の一人で、道警の監督者である道を相手に損害賠償請求訴訟を起こした桃井希生さんが事件と裁判の経緯を報告。桃井さんと大杉雅栄さんの原告2人のほかにも8人がヤジなどを理由に排除されたこと、証人として出廷した、排除に関わった警察官4人全員が警備・公安部門所属だったことなどを説明。22年3月の札幌地裁判決では原告2人に対する表現の自由の侵害があったと認定され、23年6月の札幌高裁判決では、大杉さんに関しては周囲による危害から守るためで違法ではなかったとしたものの、桃井さんの排除については再び賠償が認められたと報告。「ヤジが排除されるような社会で、どんな自由があるだろうか」と訴え、最高裁に舞台を移した裁判闘争への決意を伝えました。

暴走の最初の一歩

青木さんはパネルディスカッションで登壇。ロシアによるウクライナ侵攻について「2000年代から徐々にプーチン政権が権威主義化、強権化し、止めるべき時に権力者を止められない社会構造になっていた結果だ。ヤジや表現が排除されると、その先にあるのは戦時体制。たかがヤジ、されどヤジだ」とこの問題の重要性を強調しました。

また、2人を排除した警察官の所属する警備・公安部門は、戦後の自治体警察というシステムの中でも異質で、警察庁を頂点とした中央集権的な組織となっており冷戦終結で「反共」という公安警察の存在意義が薄れた後は、組織の生き残りのため政権のために動く情報機関のような存在になっており、しかも安倍政権は、要職に警察官僚を起用した警察政権だったと指摘。今回の事件はそうした状況の中、権力の暴走の小さいけれど最初の一歩だ、と警告しました。

◇

青木さんの言う、小さな暴走の一歩を止めないと、その先にあるのは戦争への道だ、という懸念。独自の理念を欠く岸田政権がただ故安倍氏の遺した路線を踏襲し、ウクライナ戦争を奇貨として軍拡を進めて「米国と一体となって戦える国」に向かっている今こそ重要だと思いました。また、ディスカッションの中で大杉さんが語った「公安を過大評価して萎縮してしまっては相手の思うつぼ、私たちの目指す社会には近づけない」という言葉も印象的で、恐れず堂々と物申すことの大切さを改めて感じました。

「NPOふくろう成年後見センター（略称：ふくろう）」からのご案内

「ふくろう」は成年後見業務などを通じて、障害のある人の権利擁護を考えるNPOです。知的障害、自閉症スペクトラム症、聾者、盲者、社会的心理障害（旧精神障害）、身体障害、難病等の方の支援を意識して行っています。「ふくろう」は毎年50万円ほどの黒字を出しています。そこで、その黒字を利用して、障害者の権利擁護活動のための講演会、映画上映会を毎年、札幌市内で行っています。

「障害者の権利擁護」という限られた枠（制約）がありますが、市民の方が企画及び当日の運営を持ち込んで下されば、理事会でその内容等を検討して「ふくろう」の趣旨を逸脱しない場合には共催をさせて頂きます。

障害によっては受入先がないのが実際のところです。　自宅のある人は充分自宅で支援できます。西村が支援している一人住まいの人は6人います。誰にとっても、自宅は過ごしやすいのです。

連絡先はnpohukuro@gmail.com、 fax011－200－0181です（担当：弁護士西村武彦）

購読料と寄付をありがとうございます
（敬称略）9.17～11.8

永井智子　村田和代　秀嶋ゆかり　鶴田昌嘉
戸谷真智子　但馬桂子　田畑　豊　石井たか子
久野真紀子　木村玲子　松元保昭　高橋　儁
吉田真由美・赤石としあき　阿保亘　竹田とし子
高橋政春　中小路朋子　堀　泰雄　清水俊子
小林千賀子　沼崎勝洋　富森保枝　中川洋子
川原勝利　増子捷二　伊藤牧子　土本武司
堀元　進　津田　孝

購読料とカンパ合計　101,000円は印刷代と送料に使わせていただきます。郵便振替「銀河通信」02740-7-56535 年間2,000円(郵送読者)をお願いします。web読者のカンパも歓迎します。

本 Books

過去と現在の戦争の歴史がつながる

カティンの森のヤニナ
独ソ戦の闇に消えた女性飛行士

小林文乃著　河出書房新社
2,552円

11月5日に北海道ポーランド文化協会の特別講演会で小林文乃さんのお話を聴く機会がありました。小林さんが辿った旅をスライドを使って再現して、ヤニナを身近に感じました。

「カティンの森事件」は、第2次世界大戦中の1940年、2万人のポーランド将校が何者かによって虐殺された事件ですが長く語られることがありませんでした。当時のポーランドはソ連とドイツに分割占領されており、両国はお互いが犯人だと主張。戦後もなお、決着がつきませんでしたが、その後、ソ連が公式に謝罪しました。その中にたったひとりの女性の犠牲者がいました。 彼女の名前はヤニナ・レヴァンドフスカ。当時、珍しい女性パイロットだったことを知り、小林さんは興味を持ちヤニナの足跡をたどります。

ロシアのウクライナ侵攻は、ポーランドがドイツやソ連に占領されていた時代と重なります。

ヤニナの妹アグネシュカは、ドイツ占領下のワルシャワで地下活動に身を投じ、ヤニナがカティンの森で殺害された2カ月後、ナチスに逮捕・殺害されるのです。ソ連とドイツで殺された姉妹の姿は、他国に踏みにじられてきたポーランドの歴史そのものです。

私が「カティンの森」事件を知ったのは、2007年に公開されたアンジェイ・ワイダ監督の「カティンの森」でした。ワイダ監督の父は将校としてここで殺されたのです。次々と銃殺されラストシーンは、とても正視できないほど残忍でした。現在でも数千人のポーランド人が行方不明のままだという。

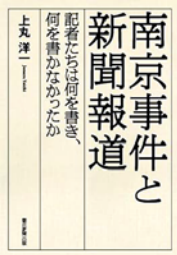
ワイダ監督の作品はもうずいぶん昔ですが「地下水道」「灰とダイヤモンド」を観て、ポーランドの人々の抵抗運動に力づけられました。

小林さんの旅は、ワルシャワからクラクフ、グダニスク、ボズナン、カティンの森へと続きました。そして多くの人に会い、話を聴き、資料を探します。 ヤニナの短い人生が浮き彫りになります。ヤニナの父はポーランドの将軍でした。

ポーランドには親しみを覚えます。 2014年にアウシュヴィッツを訪ねました。旅したのは8月でしたがとても北海道に似ていました。日本ガイドの中谷さんに館内で説明を受けました。クラクフを案内してくれた女性ガイドは、ワルシャワ大学の日本学科で学んだ方でした。

本書と、小林さんのお話を聴き、長い歴史の中で頻繁に他国の侵略を受け、何度も復活を遂げてきたこの国の歴史をあらためて知りました。戦争はあってはならないと強く思います。（樋口みな子）

憲法の理念こそ報道の理念の土台である



南京事件と新聞報道　記者たちは何を書き、何を書かなかったのか

上丸洋一著　朝日新聞出版
2,860円

朝日新聞の記者として上丸洋一氏は、憲法9条にかかわる問題、右翼言説の問題、原発の問題などに腰を据えて取り組み、分厚い著作を公表してきた。その取材、分析の確かさと取り組む姿勢、価値観は常に高い評価を得てきた。その上丸氏が朝日を定年退職してから取り組んだのが本書である。南京事件という虚実織り交ぜた言説が飛び交う事例に対し、報道という視角から取り組み、当時の報道の問題点を指摘しつつ歴史的な事実を知る手がかりも提示している。

本書にはいくつかのポイントがある。まず一番目は巷間に流布されている根拠薄弱な言説に対する批判的な分析。南京事件に対する否定的な言説は俗耳に入りやすく拡散しやすいが、それらの言説の問題点が明瞭に指摘されている。

二番目はこれが本書の主題でもあるのだが、戦時の報道がどのような性格を帯び、記者たちは心情的にどのような状況下に置かれ、人々への情報を発信したのか。著者は南京事件にかかわった報道関係者の多くが戦後沈黙を守ったことに注目する。彼らは何を見たのか。そして何を伝えたのか。彼らが見たことと、伝えたことの間には何があるのか。豊富な事例に即した報道の分析は戦時報道というものの姿を浮かび上がらせている。

そして三番目は著者の現在のメディア状況に対する危機感である。終章は「過ちを繰り返さぬために」とある。南京事件にかかわった記者やカメラマンは終戦後も悔恨を抱き続けた。今日の社会状況に対し、現役で報道に携わる者は将来悔恨を抱くことが無いようにと著者は念じる。政府への批判的な論評を公開すれば即座に「反日」「非国民」などという攻撃が殺到するのが現状である。しかし報道は国家に忠誠を尽くすものではない。憲法の理念こそ報道の理念の土台であると著者は明確に論じる。著者の姿勢、価値観は本書でもゆるぎなく貫かれており、ジャーナリズムのあるべき姿が示唆的に論じられている。（石川旺）

10.30 札幌ファクトリーのレンガ館のツタ紅葉がファンタジッック！（撮影・Minako）

市民に優しい明石市政

日本が滅びる前に～明石モデルがひらく国家の未来～

泉　房穂著　集英社新書　1,100円

人口150万人の神戸の西に隣接する明石市は、「神戸の隣」といわれていましたが、人口30万人の立派な中核市です。明石市前市長・泉房穂さんは、3期12年間の市長職をこの春退任されたのを機に2冊の著書を出版。

1冊目は『政治はケンカだ！明石市長の12年』、そして、2冊目は『日本が滅びる前に 明石モデルがひらく国家の未来』(208頁 集英社新書)です。1冊目と2冊目は一部内容が重複していますが、どちらもお勧めです。

神戸市は今、人口減少にありますが、明石市は、人口増加となっています。その違いに、ゼネコンに優しく市民に冷たい神戸市政と、その真逆で市民に優しい明石市政があります。市議会やメディアを敵に回してまで市民本位の市政をされ、「所得制限なしの5つの無料化」など子育て施策の充実を図った結果、明石市は10年連続の人口増、7年連続の地価上昇、8年連続の税収増などを実現しています。

明石市は、今春の統一地方選挙で泉さんの市政継承の後継女性市長、兵庫県議1人、明石市議5人の全員当選を勝ち取られています。泉さんが応援された、同じく神戸市と隣接の三田(さんだ)市人口約11万人の市長選挙で新人の当選に結びついています。また、岩手県知事選挙では、達増知事の応援にも駆けつけておられます。今、泉さんの行動は、展望の見えない日本の国政・地方政治に、明石市で実現できた手法を地方自治体に広めていき、そして、県政、国政にも展開できると著書で書かれています。とりあえず2冊目をお勧めします。(高橋精巧)

小学生に泣かされてしまった「Dランドは遠い」

さよなら、田中さん

鈴木るりか著　2017出版　小学館　1,145円

「Dランドは遠い」は、『さよなら、田中さん』に収録されている短篇小説で、著者の鈴木るりかさんが小学4年生の時に応募した小学館主催の「12歳の文学賞」で大賞を受賞した作品です。同書には、他にも翌年、翌々年の同大賞受賞作品と書き下ろし3作品が収められています。

著者の鈴木さんは2003年東京都生まれで、幼い頃からお母さんと図書館に通っていました。絵本が好きで、絵や写真を見ながら物語を作って楽しんでいたそうです。現在著書は数冊あり、昨年早稲田大学社会学部に入学しています。

「Dランドは遠い」の主人公花ちゃんは多分小学生4年生と思われます。ある時、友人の凛ちゃんからクラスメイトの女の子2人がドリーミングランドへ行く話しを聞き、「私も行きたいよ」と言って仲間入りします。でも、母一人子一人の花ちゃんは、化粧品も洋服も買わずに男勝りで工事現場で働いているお母さんを思うと、「行きたい」とはなかなか言えないし、入場料や交通費なども含めて1万円位かかるのだから、「お年玉を貯めてるから」では無理な話しです。お金を得る手段をあれこれ悩んだ結果、花ちゃんは、今の世の中、普通なら恥ずかしくて出来そうもない事を考えるのですが、Dランドへ行くために花ちゃんは必死です。必死にお金を得ようとしますが，仮に得たとしても5円、10円の世界ですから、得た金額は1万円には遥か遠いものです。改めて小学生の無力さを痛感するのです。なおかつ、その恥ずかしい現場を同級生の男子2人に見られ、見下された言葉を投げかけられて傷ついている時、テレビニュースで、遊ぶ金欲しさに悪い事をして捕まった中学生の話しを見ます。もしかしたら自分も遊ぶ金欲しさだったんだからこの中学生と同じじゃないか。いうならば同じ穴のむじななんだ。花ちゃんは気づきます。

人は他人を羨ましがったり、欲しがったりする癖があります。勿論、それを手にするために努力を惜しまない事が成長になったりもしますが、努力の仕方によっては人間性を損なう場合もあります。花ちゃんはきっと努力の仕方が間違っていたと感じたのでしょう。そして胸を張ってドリーミングランド行きをやめにするのです。

最後に、「稼げる大人になったらお母さんを連れて行こうと思う」と決心する花ちゃん。けなげな愛おしさに涙した物語です。(のしろや秀樹)

屈しないことが沖縄の民主主義だ

南風（まぜ）に乗る

柳　広司著　小学館　1,980円

本土から切り離され、米軍支配下に取り残された沖縄は「独立」に向けた闘いを開始します。

東京でビンボウ詩人をしている山之口貘，沖縄でアメリカ軍と闘う瀬長亀次郎，そして東京の『沖縄資料センター』を立ち上げた中野好夫。そこで働くミチコ。4人の視点でアメリカ軍に占領された沖縄が本土復帰を果たすまでの27年を描いた作品です。

亀次郎の演説が圧巻。沖縄県民の心をがっちりつかみます。亀次郎を描いたドキュメンタリー映画「米軍が最も恐れた男　その名は、カメジロー」を思い出す。

1952年サンフランシスコ講和条約で沖縄と引き換えに日本は主権を回復。朝鮮戦争の好景気に沸く本土。一方ベトナム戦争の前線基地となった沖縄は戦争帰りの荒んだ米兵によって暴力殺人事件が繰り返されます。しかも米兵は無罪放免。沖縄の怒りは高まっていく。終戦から返還までの沖縄の実情がリアルに伝わってきます。

1972年本土復帰後も、闘い終わらない。沖縄県民の人権よりも米国の権益を優先した政治家の

姿勢は、現代に至っても変わっていません。狭い沖縄で米軍基地の70％も集中して、有事の時には沖縄が戦場になることが懸念されます。

沖縄の現状は知っているつもりでしたが、本書を読んで知ったことが多かったです。沖縄のニュースは十分に伝わっているとは思えません。沖縄を題材にした本や映画を観て学ばなければと思いました。
（樋口みな子）

あたしはもう黙らない。私たちの尊厳を踏みつけることは許されない

リスペクトR・E・S・P・E・C・T

ブレイディみかこ著　筑摩書房　1,595円

2012年のロンドン・オリンピックを契機とした再開発計画をめぐり、住む場所を追われたシングルマザーたちが公営住宅の空き家を占拠した14年の実際の事件をモデルにしています。

地方自治体の予算削減のために、ホームレス・シェルターに住んでいたシングルマザーたちが立ち上がる。英メディアで大きく取り上げられ、シングルマザーたちを応援する声が拡大していく様子を描きます。小説では「E15ロージーズ」を名乗って街頭で声を上げ始めます。日本では、平和運動は一般的でも、生きる尊厳を求めた闘いはあまり聞いたことがありません。「アナキズムはお願いしない。自分たちの問題を自分たちで解決するんだ。暮らしこそ政治の場なんだ。それを体現しているからE15ロージーのシスターズはめっちゃクールなんだ」その心意気と勇気が素晴らしい。

彼女たちが公営住宅を占拠したあと、たくさんの人たちが集まってくるのです。食べ物の差し入れや、子どもたちにおもちゃを持ち寄ったり。若いママたちの直接行動が直接民主主義の芽を生み出すのです。そして現在のトップダウンの政治システムがいかに機能していないかということまで暴き出していきます。

「リスペクトのないところに尊厳はない。尊厳がないところで人は生きられない」とつぶやき「この国の政治が人々のために資産を使い、人々の尊厳を守るようになるまで、あたしたちが黙ることはありません」と語るジェイド。次にマイクを持ったギャビーは「「ロージズ」という名前を名乗ったのは薔薇は人の尊厳を象徴する花だから。住まいは人の尊厳です。ねぐらのない人々に住まいを与えることは、人間の尊厳を守ること。人はだれだって安全で温かい場所で眠り、子を育てる権利があるんだと信じること。誰であろうとこの薔薇を踏みつけることは許されません。闘ってきます」に、集まった支援者から、拍手が送られるシーンに涙しました。どれだけ貧困に苦しむ人たちを勇気づけたことか。記者である史奈子の生き方も変えていきます。

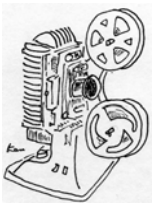
「何かを取り戻すために、やるかやらないか、ではなく、やるしかないんだ。闘うことが自分をリスペクトすることだ」と強く訴えます。力強くて、闘うことの大切さが胸に響きます。

再開発によってオリンピックパークが造られた。「きれいな街」に生まれ変わることで住宅価格や家賃が高騰し、もとの住人の追い出しにつながった。こうした都市が高級化していく現象に、ブレイディさんは異を唱えるのです。

ジェイドを取り巻く人々がとてもいい。シングルマザー仲間のギャビーとシンディ。日本の大手新聞社の駐在員で事件を少し冷めた目で見る史奈子、その元恋人で無邪気なアナキストの幸太。どっしり骨太な存在感でみんなを支える配管工のウィンストン。そして何よ革ジャンとパンクな、いで立ちが最高にかっこいい、かつての運動家ローズ。

尊厳が守られずに苦しんでいる人は日本でも多い。こんな生き生きとした抗議が日本でも広がってほしい。（樋口みな子）

ブレンディみかこさんのファンです。「子どもたちの階級闘争」「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」（2019年215号）「他者の靴を履く」（21年226号）「両手にトカレフ」（21年239号）など号を書いているものは銀河通信で紹介しています。



世界を変えた、崇高なる不屈の魂

シモーヌ　フランスに最も愛された政治家

オリビエ・ダアン監督

「哲学者のシモーヌ・ヴェイユとどんな関係があるのかしら」と予備知識なしで観たのが恥ずかしい。

エディット・ピアフ、グレース・ケリー、世紀の女性を描くオリヴィエ・ダヤン監督3部作のラストを飾るのは偉大なる女性、シモーヌ・ヴェイユの生涯です。その誇り高き生き方は、どこから生まれたのだろう。シモーヌは母と姉の3人とアウシュヴィッツ強制収容所に送られました。母は収容所で亡くなり、父や兄は別の強制収容所に送られ、どこで亡くなったのかも分からないという。ユダヤ人であるために迫害され、家族を失い、生死の境を彷徨った体験が人権を守る行動力につながっていきます。

1974年パリ、カトリック人口が多数を占め、更に男性議員ばかりのフランス国会で、シモーヌ・ヴェイユはレイプにより被害や違法な中絶手術の危険性、若いシングルマザーの現状を提示して「喜んで中絶する女性はいません。中絶が悲劇だと確信するには、女性に聞けば十分です」と、圧倒的反対意見をはねのけ、のちに彼女の名前を冠してヴェイユ法と呼ばれる中絶法を勝ち取ります。

1979年には、女性初の欧州議会議長に選出されます。移民やエイズ患者、刑務所の囚人など弱き者たちの人権のために闘います。エイズ患者と病室で語り合い、囚人たちの劣悪な環境を目の当たりにして、人が更正できる場所へと変えていく。誠実なまなざしが胸を打ちます。

弱き人々の人権と尊厳を守る原点、アウシュヴィッツでの壮絶な体験には息を飲むシーンもありました。演じたエルザ・ジルベルスタインがシモーヌ本人かと思わせるような迫力がありました。

フランスで最も愛されたシモーヌの人生に大きな励ましをもらいました。（樋口みな子）

もし次の世に生まれたら虫でも良い明るい目を持って生まれてぃなぁ

瞽女GOZE　瀧澤正治監督

2005年に105歳で亡くなった、日本で最後の「瞽女」である盲目の芸術家であり、人間国宝小林ハルさんの実話を映画化。

前号で「瞽女」のチラシを入れたら新潟が故郷だという友人から「瞽女さん」の記憶があるというお手紙をいただきました。

私はこの映画で瞽女を初めて知り、三味線の音に日本の古典的な物語や歌を唱える演奏者として、地域に根差した文化だと感動しました。

札幌映画サークルで上映会が出来てとても良かったです。私は午後の部で観ましたが、午前も午後もほぼ満席だったようです。

この映画の主人公はハルさんです。その修行は過酷でした。母は心を鬼にして、針通しを教えます。

親しみを込めて村人たちは瞽女さんと呼びました。三味線を奏で語り物などを歌いながら、各地を門付けして歩く旅芸人です。

瞽女さんたちは視力のある手引きを先頭に親方、姉弟子、弟子と前を歩く人の荷に手をふれて、動きを知り、杖で足元を確認しながら旅をして、瞽女さんを待ち望んでいる山村僻地の村人に、瞽女唄を届けたのです。菜の花畑を歩くシーンが美しく、「花の香りで、きれいに咲いているのを感じるのよ」という台詞が印象的。親方には意地悪な人も優しい人もいます。それは一般社会でも同じですね。ハルさんは「悪い人と旅すれば修行、良い人と旅すればお祭りになる」と語ります。でも全部を糧にして生きてこられたハルさんの人間性が、素晴らしい瞽女唄に昇華したのだと思いました。視力ある横暴な手引きの壮絶ないじめのシーンは、胸が痛くなりました。盲目のハルさんが「もし次の世に生まれたら虫でも良い明るい目を持って生まれてぃなぁ」と語る姿に涙しました。少女のハル役と娘時代のハル役がとても良かったです。

世界の人々に生きる事の喜びや楽しみを伝えたいと願って、映画にした瀧澤監督は2022年10月28日に急逝されました。代表作になったはずでとても残念です。

上映後、ハルさんの最後の弟子、萱森直子さんの瞽女唄演奏も力強く良かったです。きっとハルさんが天国で見守っていたのではないでしょうか。

（樋口みな子）

人をわかるってどういうことですか

アンダーカレント　今泉力哉監督

夫の悟（永山瑛太）に突然失踪された銭湯を営むかなえ（真木よう子）と、その水面下での人の心の揺れ動きを描く。最初にアンダーカレントの意味が記される。それは「（水や空気などの）底流」のこと。人の心にも当てはまります。人は一筋縄ではいかない。わかったようでいてわからない。そんな体験は誰にでもあるのではないでしょうか。

今泉監督は抑制的で繊細な描写で表現します。セリフは極限まで削ぎ落され、余白で多くを物語るのです。かなえは夫の失踪で気持ちはなぜ？という思いでいっぱいに違いない。しかし仰々しくそれを表現するようなことはしない。日常の中のほんのわずかな機微で、様々な心の揺れ動きを伝える。かなえの営む銭湯で、堀（井原新）が働くようになります。無口で何を考えているのかわからない。でも彼も何かの秘密を抱えて苦しんでいることが伝わってきます。それが彼の心の底流にあるもののようです。

ドラマの序盤は、真面目に黙々と働く堀に対してかなえが好感を持つようになり、穏やかな日常を取り戻していく姿が描かれる。もちろん、それも抑制的に見せていく。

「人をわかるって、どういうことですか？」これは、悟を捜索する探偵・山崎（リリー・フランキー）が、かなえにつぶやくセリフです。一見だらしなくみえる風貌から山崎を見くびっていたかなえは、想定外の言葉に思わず絶句してしまう。原作でも本作でもハイライトとなるシーンです。言葉は少ないけれどなんだか気になって彼らの心理に引き込まれました。

私たちは、他者と触れ合う中で、つい相手をまるごと分かったような気持ちになってしまう。しかし、人の心というのはそこまで単純なものではない。かなえも、悟の失踪を知って、本当の悟ではなく、影しか見ていなかったことに愕然とします。フランス映画のようだなと思う。そんな誰もがかかえる不器用さが、『アンダーカレント』では表現されていて、私の今の気分ととても合う。激しく言葉をぶつけ合う作品でないのが心地良かったです。

深い喪失感、怒りや悲しみを静かに見つめるかなえを演じる真木よう子に共感。それを浮かび上がらせる照明も自然光を優先し、半分は影で造形します。緊張感が終始横たわり、緩めのテンポにも関わらず、集中力が途切れないのが不思議です。ラストシーンの堀の振り絞った告白に顔を上げるかなえの表情に安堵しました。「一人で苦しまなくていいのよ」との思いが伝わりました。

音楽が知的と思ったらエンドクレジットに音楽・細野晴臣と、流石です。（樋口みな子）

澄生さんありがとう
楽しい授業と星の観測と家族を愛した７０年

定年後は、病気に苦しんだ澄生さん。自宅に帰ることを待ち望んでいましたが、12月1日早朝、急性呼吸不全で息を引き取りました。今は星になって、私たちを見守っていると思います。葬儀の弔辞で澄生さんの友人は「樋口さんは病に負けたのではない、勇気を奮い起こして最期まで病とたたかったのだ、と思います」と語りかけました。通信に「銀河通信」と名付けたのは澄生さんでした。輝いていた頃の写真で

1988年8月　福島県白河観測所から1000キロを旅してクッチャロ湖畔に届いたチロ望遠鏡で球状星団M22を見ました。

オリオン大星雲：撮影　樋口澄生

澄生さんを偲んで頂けたら幸いです。
（樋口みな子）

2019年自宅に天文台を建てました

2014年3月美香保中学で定年を迎えて挨拶する澄生さん

理科の授業風景。考える力をつけたいと実験に力を入れていました。時には夜、学校の屋上で星に関心のある生徒たちと観測会を開くこともありました。

1997年、ニュージーランドの旅を満喫。昔の通信で確認したらマウント・クックはツアーとは別で、澄生さんが出発1週間前に、麓のホテルをやっと予約したことが分かりました。

ニュージーランドでは南半球のアルプスと称されるマウント・クックのトレッキングに張り切って挑戦。左上に白いマウンテン・クックがくっきり見えます。右はフッカー氷河湖です。

クライストチャーチ郊外の農場見学で、羊の毛刈りを体験しました。物価が高く生活は苦しいと聞きました。それでも自然が豊かで、そのことに誇りにもし、大切に守っている人々に感銘を受けました。

2023年5月12日、70歳の誕生日をデイサービスの皆さんが祝ってくれました。22年5月25日に大きな手術を乗り越えて、リハビリによって歩くことができるようになって我が家に帰ってきました。そのことを喜びいっぱいで迎えたのは私と息子だけではありませんでした。1年2ヵ月お世話になったデイサービスのスタッフは、一人の人間として澄生さんの尊厳を守って温かく接してくださいました。ありがとうございました。

澄生さんへ感謝状

道北の滝上中学校からスタートした教員生活でしたが、その後は札幌市内の中学校をいくつも転勤を重ねて、今日、美香保中学校で定年を迎えることができ、家族としても感謝の気持ちでいっぱいです。

1985 年に私たちは結婚しましたね。私は当時、旭川の大学病院で臨床検査技師として働くかたわら、自然保護運動にも関わっていました。そんなとき、日高の横断道路計画が持ち上がり、各地から集まった市民と調査。その時に出会ったのが澄生さんでした。その縁で結婚することになるとは、夢にも思いませんでした。

出会いから結婚まで半年しかありませんでした。当時、澄生さんは北辰中学に勤務していましたが、同僚が中心になって運営してくれた、温かい結婚式は生涯忘れられません。

札幌での共働きが始まりました。子育てしながらの共働きは本当に大変でした。朝早くから息子を保育園に預けて、仕事と育児に奮闘する毎日でした。家事や育児は平等でと主張する私に対して、気持ちは理解しても行動してくれない澄生さん。マイペースでしたね。

我が家の茶碗洗い闘争は忘れられません。「夕飯の支度を私がしてるのだから、茶碗位洗ってよ！」「あるだけの食器全部使ってから洗うよ」と主張する澄生さん。私の怒りが爆発しました。結局、私が食器洗いもせざるを得ませんでした。江別に新居を構えた時、何よりも食洗機を台所に設置したのは私の希望でした。使った食器を食洗機に並べるのが澄生さんの仕事になりました。その思い出の食洗機も壊れてしまい、昔ながらの洗い方に変わりましたが、澄生さんの意識革命にはなったのではと思います。

家族３人で初めて、ニュージーランドを旅行したのも楽しい思い出です。マウントクックのフッカー氷河をトレッキングしてフッカー氷河湖まで歩きましたね。マウントクックが間近に迫り感激しました。家族にとって、苦しい時、つらい時もありましたが、心に豊かな宝物があるって素敵なことです。

病気もありましたが、澄生さんは不屈の精神で乗り切りました。特に２０１１年にリウマチで肩に人工関節を入れる手術をしましたが、以前よりもずっと前向きになったのは驚きでした。天体観測に意欲を燃やし、定年後のライフワークになりそうですね。

体力があるとは思えないのに、深夜に翌日の実験の準備などに頑張っていました。その姿は尊く、心の中で応援していましたよ。

私の発行する個人通信「銀河通信」は発行２５年になりましたが、私の取材を兼ねたさまざまなイベントや、登山など、反対することなく応援してくれました。仲間や友人から、「みな子さんの夫さんは理解があるね」とよく言われました。これからもよろしくお願いします。

定年まで教員として全うできたこと。本当にお疲れさまでした。家族から感謝状を贈ります。今後も健康には十分に注意して再任用の中学校でも頑張ってください。

2014 年3月２５日　　樋口　みな子

銀河鉄道に乗った澄生さん、輝く星になって私たちを見守ってください

病死した澄生さんの生前の思いや、キリストに救いを求めたいきさつを小野有五さんと私が伝えたいと思います。

私は、カトリックの洗礼を受けて、静かに祈ることで謙虚になれたこと、心の平安を持てるようになりました。澄生さんも同じだったと思います。

静かに明日を信じて待つ

不安や眠れぬ苦しみ、看護師や他のスタッフ、執刀してくださる先生に囲まれながらも、手術を受ける私はしょせん一人の人間、多くの不安を抱えることは否めません。

期せずして二人の方からメールが届きました。みなちゃんの友人、科学者の小野有五先生からは「大変な手術なのですね。成功をお祈りしています。『神さまには、望むことは何でも、お祈りしなさい。そうすれば、人智を越えた神さまの平和が、あなたの心と考えを守るでしょう』」と聖書はいうのです。不思議な言葉ですが、本当に深い真理を感じます。どうか神さまの恵みが、澄生さんとみな子さんの上にありますよう、とお祈りしております。神さまが与えて下さるのは、人間の勝手な思い、願いを越えた『平和』なのです、しかもそれは、ただ与えられるのではなく『それがあなたの心と考えを守ってくれる平和』だというのです」。

私の古くからの友人からは「樋口君が自分で思い描いている事と、自分に起きている身体の状態が、相反する現状に非常に不安で辛い気持ちでいると思いますが、これを乗り越えていくのも樋口君の人生なのだと思います。慰めることもできませんが、でも「神さまは乗り越えられない試練は与えないということががあります。私は神を信じているわけではありませんが、この言葉はその通りだと思っています」。

今回は脳の真下に頸動脈が走っていて、やはり気を付けなければならない手術です。手術前は眠れぬ夜となり、不安が募りました。そんな時お二人のメールを思い出し、「静かに明日を信じて待つ」という気持ちになれたのは大きかったと思います。ふたつの手術（左肩リウマチの人工関節抜去と脳下垂体腫瘍）を終えて、生きていることのありがたさを噛みしめています。

リウマチの痛みは続いていますが、また天体観測ができる日を楽しみにしています。是非我が家の天文台にお越し下さい。（2020年8月　樋口澄生）

一日一日をゆたかに生きていくことを願って

小野有五

2020年、「銀河通信」の最初からよき協力者であった澄生さんのリウマチが悪化、翌年には大手術を受けることになり、まず彼がカトリックの洗礼を受けた。キリスト教は、祈れば、信じれば、願いが叶うという「ご利益宗教」ではない。神は人智を超えた存在であり、人間の思いを超えた判断をする、だが、それはつねに神の愛の現れだ、というのがキリスト教の信仰である。人間は欲望そのものであり、願いが叶うように祈ることはたんに欲望の延長にすぎない。それを捨て去るとき、平安（ニルヴァーナ：涅槃）が得られるとブッダは説きイエスは、利己を捨て、神の愛に身をゆだねる人は欲望の奴隷から解放され、本当の意味で自由になると教える。どちらもコインの表裏のようなことである。みな子さんも2021年に洗礼を受けた。平等も自由も、人間を超えた存在を認めることで初めて得られる概念である。日本では、「天皇」を自分の側に立つ「神」としたい権力者が、それを脅かす「宗教」を排斥してきた。統一教会問題などで、ますます「宗教は怖い」と思う人が増えている今、「銀河通信」の読者の方々に、みな子さんがカトリックになったことの意味を知っていただきたいと考え、あえてカトリック・センターを、祝う会の場にした。もちろん、教会も寺院も、人間の組織である以上、過ちも多い。だがつねに、「人間を超えた存在」に目を向けてほしい、と思う。38年間をともに生きてきたみな子さんと澄生さんが、神さまの恵みと励ましを受けつつ、これからも一日一日をゆたかに生きていくことを願っている。（2023年5月20日「銀河通信35周年を祝う会」の栞から）

腫瘍はその後、雲のように広がって

一旦は快復したのですが、体調が悪いので病院に受診日を早めてほしいと相談。コロナ禍で受診日を変更することはできないと言われました。MRI検査で腫瘍はその後、雲のように広がっていました。そのことを知った衝撃は大きかったです。2021年3月に受診して手術は厳しいと言われました。いい病院があれば手術しようと決め、心の平安が得たくてカトリックの洗礼を澄生さんは決意しました。小野有五さんが、我が家に足を運んで下さり、キリスト教の神髄を学びました。有五先生は科学者です。澄生さんも天文が大好きな理科の教員でしたので、相通じるものがあったようです。広い宇宙と神とのつながりに共鳴したのだと思います。利己を捨て、神の愛に身をゆだねるとき、自由になると教えます。もう教会に通うことも難しくなることは想像できましたので、神父さまは洗礼を早めてくださり21年5月4日に受洗。私は少し学んで同年の12月25日に受洗。

病院がみつかり9月に手術。腫瘍が大きく2回の大手術でした。やっぱり全部は取りきれず、術後、呼吸困難になり、人工呼吸器につながれました。「すぐに家族で来てほしい」との電話は忘れられません。幸い命はとりとめましたが、長いICU生活が始まりました。その後、病棟に戻り、2022年3月末、回復期リハビリ病棟のある病院に転院。病院の車にストレッチャーで運ばれ、札幌市内の病院に移動しました。半年間も寝たきりだったので歩くことが出来なかったのです。リハビリで2ヵ月で歩けるようになったのは澄生さんの努力だけでなく、見えない神に救われたように思いました。2022年5月末澄生さんは自宅に帰宅。家族に笑いが戻り、ゆたかな時間を過ごせたことは幸せでした。

2023年7月に肺炎で入院しその後2つの病院で治療を受けましたが、食事が摂れず、点滴、酸素吸入になり快復することはありませんでした。12月1日安らかに永眠。（樋口みな子）